

4 医学史・医療文化博物館構想

(医学史医療文化資料の保存と活用のための博物館)

酒井 シヅ

一九九九年四月に行われた医学会総会では、展示会に予想を超える大勢の市民の参加があった。それは市民が健康に強い関心を持ち、同時に医学・医療を身近なものとしてとらえる時代になっていることを示したに他ならない。

また、人々が健康・病気に日常から強い関心をもっていることは、各地で健康展や健康教育が行われると、多くの人が集まることからわかる。事実、日本解剖学会百周年のときの人体の世界展で、約一月間で六〇万人余の人々が集まった。

なぜ、このような健康への関心の高まりがあるのだろうか。

一つは、健康不安である。さまざまな医療問題は自らの健康は自分で守らなければならないという不安がある。

また現代医学においては、臓器移植、遺伝子治療など先端医療の研究の在り方や倫理が問題になっている。昨今の医学の急速な発展が、誰にとっても身近である医療・医学の将来について不安を抱かせている。そこで、インフォームドコンセント、医療者と市民のコミュニケーションの円滑化、カルテの開示などが求められているが、それに対して、医療関係者の間にもうまく実践する規範がない。医療の現場の試行錯誤が繰り返され、混乱がみられるのが実状である。

こうした市民や社会的要望に対処するための一つの手段として医学史・医療文化博物館設立が考えられる。そこでは、

いわゆる展示物を工夫して興味あるものにすると同時に、常設展では絶えず出し物を替える、健康デズニールランド(仮称)を作ることで、市民が楽しみながら健康教育ができるのに役立てることができるといえる。

しかし、我々の求めている医学史・医療文化博物館の役割はたんに上記の要望に答えるだけでない。むしろ、以下の問題に対処するために必要である。

第一は、現代の医療制度では医療経済の行き詰まりと現状の医療制度の矛盾による破綻が、そう遠くない日に露わになることが予想される。医療経済の建て直しは、国家的な問題であるが、この問題の解決には個人的な意識問題を抜きに対応できない。長野県でみられるように個人の保健行動が医療経済に影響を与えることが知られている。こうした医療行動のノウハウを調べ、全国的に普及させ、健康獲得の意欲を高める組織の中核となる専門の機関は、いまNHKなどマスコミなどに依存しているが、それらは一過性である。それを継続的に、組織的に活用する機関として役立つ医学・医療博物館が必要である。

第二は、諸外国では国立あるいは私立の医療博物館や医史学研究所があり、上述の活動をするための人材の養成、資料の保存活用が行われている。イギリス、アメリカ、ドイツ等では、その研究者が政府機関に助言し、健康政策の決定、実施に参加して効果をあげている。しかし、わが国では、こうした医療の諸問題や健康意識の普及に対して、個人的に研究活動をしている人がいるが、結集した力になっていない。大学など研究機関が行政とタイアップして組織的に対応する中核機関がない。また専門家を養成する機関がない。

第三は、日本では、医療者が専門知識に偏りがちであることが批判され、人間味にあふれた医療人が求められているが、現在の医学・看護教育においては、とくに文部省が一般教育の大綱化を実施した後では、国家試験を目指した専門科目以外の一般教育や医療文化、医療社会学、医療経済学、医療知識の市民への普及のための教育がほとんど行われていない。行うことが難しい状況にある。それはこうした教育を行う専門教員を大学に置く余裕がないことも大きな原因

のひとつである。そこで医学史・医療文化博物館に大学院レベルの教員養成コースを置き、そこで教育された人、研究にたずさわる人々が上記の教育や市民の健康普及教育の中心になって活躍する。

第四は、明治維新直後、西洋医学を本格的に受容してから、先人はたえず西欧に追いつこうとつとめ、戦前はドイツの医療、医学を追い求め、戦後はアメリカの動向を追いかけてきた。そのために日本の医学・医療を原点から見据えることなく、未来を論じてきた。しかし、現代のように、医学は急速に進歩して、生殖医療や臓器移植のように、人類が直面したことがなかった問題が出てきた。それを前に混乱が生じている。進むべき道を求められている。そこで医の原点に立ち戻って歴史を振り返り、指針を探すことが必要である。

第五は、歴史の重要性は認めても、実状は医療・医学の資料の活用が十分に行えない状況にある。これまで、医療文化資料の収集は個人の趣味と見なされ、組織的に行われなかった。そのために、収集した個人がなんらかの理由で資料を手放すと、四散するということが繰り返されてきた。医療文化資料は、われわれ現代人のためだけでなく、未来に生きる人たちのための遺産である。それらを保存して、受け渡していかなければならない。先人が残した医療文化・医学資料を保存、整理する医学博物館を設立することが必要である。

第六は、医学・医療文化資料を管理するための専門の学芸員の養成が日本では全く行われていない。専門性の高い資料であるために、一般の学芸員の片手間で行えるものではない。こうした資料を扱える専門学芸員の養成が必要であるが、それを医学史・医療博物館で行う。

第七は、現在の日本の医学・医療関係資料の実状調査を行ったが、貴重な資料を保存している博物館、資料館が危機的な状況にあることがわかった。たとえば、たくさんの医療文化資料を保存している医学文化館が経営困難となり、二年前から閉館している。また、旧陸軍軍医関係の資料を保存している自衛隊の資料館は予算削減のために、近い将来、それらの資料がどうなるか分からない状況にある。

また、明治以後の日本の医学の発展を即座に理解させるのに、医科機械が役立つが、それを収集展示した資料館が十分な予算がないために、逼塞した状況にある。このように多くの資料館が維持管理が危機に瀕している。

こうした資料を救い、現在の医療福祉活動に役立てるとともに、将来に遺産として残すために医学史・医療博物館の設立は急務である。

第八は現在の医学・医療関係の資料を組織的に集め、現場教育に資することである。現在、全国の医療機関のレベルが均一でない。全国の医療のレベルを標準化するために現任教育などが必須である。その役割の一部を博物館が担うべきである。

第九は、現状を知るために現代の資料を分析することが重要である。それらを組織的に行うことが博物館の任務である。現在は研究者の恣意に任せ、その研究が終われば標本類は放置されている。いまま将来も貴重な医学関係資料となると分かっていても、組織的に保存するところが皆無である。それらを収蔵する博物館が必要である。

第十は、いま医学図書館の収蔵能力の限界から多くの医書や記録類が放棄されている。また、こうした記録類を保管しているところも、活用のためのデータベースがないために十分利用される状況にない。そのために、こうした資料を保管して、活用するための専門機関の設立が急務である。

第十一は、現在、医学教育の中で、医の倫理、歴史の専門家の養成を行っているところはほとんどない。しかし、これからは哲学や歴史学などの片手間ではなく、医療専門の倫理学、歴史を研究できる環境を作ることが必要である。

以上の他に、医学医療博物館を必要とする理由があるが、医学史・医療博物館の設立は日本の国民の健康を守り、医療の健全な発展を望む立場からきわめて重要である。医療文化史博物館を建設して、健全に発展させることは内需拡大にもつながることである。

医学博物館構想

設立目的

医学史・医療文化資料を収集し、管理、保管して、広く市民に活用できる活動を行い、日本の医学医療関係者のみならず、一般市民の健康教育に寄与し、医学・医療の健全な発展を助けることを目的とする。

形態

国立民族博物館、国立歴史民族博物館と同様な国立大学共同利用機関であることが望ましいが、現在の財政状況では望むべくもないので、半ば公的な機関としての博物館であることを望むが、これがどういものがよいか、どうしたら実現可能かは最重要な研究課題である。

運営・組織

研究部門

管理部門

医学研究情報センター（展示部門、コンピューターによる情報収集・管理発信基地）

建物及び敷地

建物…展示館、講堂、図書館、倉庫、研究棟、（実験動物施設、管理棟、外来研究者ならびに長期滞在研究者のための宿舎、厚生施設

敷地